

京都大学	博士(文学)	氏名	石野一晴
論文題目	中国近世巡礼史研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>巡礼は中国においても極めて盛んに行われてきた。本論文は、民衆にとって常態時と非常態時の接点に位置するこの行為を題材に、そこに見られる民衆の生活や心性、その社会経済史との関わり、その権力との関係や東アジアにおける交易との関係など様々な問題を解明しようとするものである。</p> <p>「序章」ではこれまでの巡礼研究の歩みを振り返り、本論文の狙いを提示する。巡礼について急速に研究が進むようになったのは、文化人類学を含めた地域研究が盛んになった20世紀後半からであった。その後、各分野で盛んに研究されるようになったが、中国という地域には近年になるまで及ばなかった。中国大陸では、フィールドワークの機会が制限されており、文化人類学的手法では成果を挙げることは難しいからである。また民衆の巡礼行為そのものも公の記録には残りにくいため、歴史研究者の間で看過されてきた。本論文では、明末以降に大量に編纂された山志、碑刻をはじめとする文物史料、さらに白話小説などを史料とし、まず普陀山という聖地に焦点をあて、次に泰山に焦点を移し、それらの場所がどのような過程を経て聖地として発展していったのか、中国社会にどのようなインパクトを与えたのか、を明確にすることを目指すとする。</p> <p>まず第一章「萬暦年間における普陀山の復興」では、16世紀後半から17世紀初頭にかけての普陀山の復興と参詣について、その沿革を記した『普陀山志』や、『兩浙海防類考』および『兩浙海防類考続編』といった海防関係資料などを用いて考察を行なう。この時期の普陀山は、倭寇と官憲との戦いによって荒廃を極めていたが、その後、復興が試みられた。しかし、「倭」までもが参拝に訪れるこの国際的な聖地に彼らが再び拠ることを恐れた官憲は、巡礼者の渡航を厳しく禁じた。そのような時期に、皇太后や宦官といった権力者たちがこの聖地に盛んに寄進を行い、お墨付きを与えたことにより、禁止は骨抜きになり再度聖地として蘇ることになった。その結果、江蘇省や浙江省の民衆が渡海して普陀山に参詣に赴くための拠点が、沿岸各地にできあがったとする。</p> <p>普陀山へ巡礼した人々は江南だけに止まらず、福建・広東の沿海地域や、さらには長江以北にまで及んだ。第二章「華北からの普陀山参詣」では、この巡礼圏の広まりについて論ずる。まず、杭州の市が山東から普陀山参りにやってきた人々で賑わっていたこと、普陀山に残された巡礼者の碑刻には山東省や河南省の人々の名前が見られることから、明末清初においては華北からも多くの巡礼者がやってきていたことを明</p>			

らかにする。さらにはそれらの場所では、香会・香社という日本における講のような組織が作られ、その組織が普陀山巡礼の際にも使われていた可能性が高いことも指摘する。そして重要なことの一つとして、女性の寺観参詣や省境を超える巡礼については、これに対する禁令や批判的な言説が多かったが、実際には崇拜の対象が国家のすでに認可した範囲内のものであれば、必ずしもそれは違法な行為ではなく、官の側では彼らの行為を黙認することが多かったことも明らかにする。

第三章「普陀山の巡礼路 — 浙江省普陀山における十七世紀前半の功德碑をめぐって」では、論者が現地調査の際に見つけた「妙莊嚴路功德碑」という碑刻について、明末清初の山志を中心とする典籍史料とあわせて包括的な分析を試みる。この碑刻は明末に高僧が個人的に行った巡礼路整備事業に対して、自発的に援助を行った僧侶および在俗の信者たちの一覧である。ここから、第一章で明らかにしたような国家の保護は、絢爛豪華な寺院が建立され、巡礼地としてお墨付きを与える上で大きな意味があったものの、日常の支出などについては基本的に国家レベルでの援助はなく、士大夫や宦官といった個人の援助に頼らざるをえなかったとする。またここに見える巡礼者たちの出身地や寄進額などを分析した結果、寄進はかなり広い範囲からなされているとはいえ、現在の浙江省北部から安徽省東南部にかけての地域に集中しており、この豊かな地域が中心になって普陀山の繁栄を下支えしていたとする。

第四章「泰山娘娘信仰の登場 — 明清における碧霞元君信仰の展開」では、泰山の頂上に祀られていた「碧霞元君」の信仰について、『泰山志』や各種遊記を用いながら考察する。碧霞元君とは、明末以降の華北地域全体で信仰された泰山の女神であり、多くの民衆がこの女神に礼拝するために泰山に登った。この神は、北宋の真宗のいわゆる「最後の封禪」の際に見つかったとされる玉女像にその起源を発するが、少なくとも明代中期までは碧霞元君という名前は文献には見られず、泰山頂上の玉女廟への信仰はそれまで東嶽府君への信仰を上回るものではなかった。その信仰は地域的にも極めて限定されたものであり、現在のような地位を得たのは、明代中期のことであった。また明代中期までの碧霞元君は、その名前すらも定着しておらず、その姿も現在我々が見るようなものとは異なっていた。その後も明末にかけて碧霞元君廟に参詣する人びとは増え続け、その結果、これへの信仰は泰山周辺だけではなく、華北平原各地へと広まり、多くの行宮が作られる。その結果、次第にその名称も文献上に定着するようになったとする。

明末には数多くの文人が泰山を旅するようになるが、そこで彼らが見たものは、夜明け前から集団で参詣する敬虔な人びとであった。士大夫たちはその光景に驚き、彼らが参詣する対象が自分たちのよく知らない神であることを知ると、その由来をあれこれ後づけするようになる。しかし、碧霞元君は皇后のバックアップなどによって、明代中期になってはじめて盛んになった信仰対象であるから、その由来を古典文献に求めることはできない。文人たちは彼らなりにその女神が由緒正しい神様であるとい

うことを説明しなければならなかった。そこで彼らが考え出したのは黄帝の娘や華山の玉女という古典文献に登場する仙女が、碧霞元君に姿を変えたのだという物語であった。

しかし文献にあらわれる碧霞元君の姿は、民衆の目に映る碧霞元君とは異なった。民衆は碧霞元君を碧霞元君とは呼ばず、「娘娘」「奶奶」という年長の女性を呼ぶ言葉で認識した。娘娘は東嶽府君の娘として理解されることもあったが、ときには自分たちの村の出身である身近な女性として理解された。このような事実から、碧霞元君とは個々人の娘娘イメージの集合体であり、それに碧霞元君という名前が与えられることによって、統合されていったのではないかと述べる。さらには中国での信仰における焼香の重要性も強調し、民衆にとっての巡礼とは香の煙を通じてあの世の人々に願いや悩みを伝え解決してもらうことを望むものではなかったのか、との推測も述べる。

第五章「泰山香会碑文小考」は、民衆が泰山巡礼を行なう際にその拠り所とした香会について、その基礎的考察を行なう。泰山の北 30 kmほどの所に位置し、古くから名刹として知られる靈巖寺の本殿の壁には、泰山への巡礼者たちが残した 200 近い碑刻が埋め込まれている。この碑刻は香会ないしは香社とよばれる巡礼団体によって作られたものであった。本章ではこの碑刻の全データを整理しなおし、年代、出身地、巡礼の時期、会の構成などについて検討を加えている。これによって明らかになったのは、16 世紀後半から 17 世紀にかけてほぼ絶え間なく巡礼が行われていたこと、巡礼者は山東省を中心に河北南部・江蘇省北部・河南東部という地域から来た者が大半を占めていたこと、その基本的な巡礼圏は、おそらくは農作業の妨げにならない期間に一ヶ月程度で往復できる距離に限られた、などという事実である。

「終章」では、以上で論じたことを総括し、中国の巡礼についていくつかの特徴を挙げる。それは、巡礼聖地の盛衰は国家権力や貴人との結びつきが深かったこと、民衆の巡礼は黙認されていたこと、巡礼は複数の聖地を巡り歩くのではなく、まっすぐに特定の神のもとへ向かう形をとっていること、などである。

なお、附論の「大金喇嘛法師寶記再考」では、無圈点満文で書かれた碑刻の分析から、17 世紀前半のチベット仏教と遼東半島の社会を巡る問題について考察している。

(論文審査の結果の要旨)

論者がここで言う中国近世とは、ほぼ明清時代に限られる。これより昔、たとえば日本の僧侶円仁や成尋などによる巡礼については、これまでも研究がなされてきた。しかし明清時代に民衆によってなされる巡礼、なかでもこれにかかわる彼らの生活や心性に焦点を当てたものは、つい近年になるまでほとんどなされなかった。この方面の研究で先鞭をつけたのは、アメリカの研究者たちであるが、中国における巡礼と聖地とを概観した研究書が彼らによって出版されたのは、やっと1990年代になってのことであった。ところが現在では中国の研究者たちもこの研究にとり組むに至っている。日本においてこのテーマにとり組む研究者はいまだ少なく、本論文の論者が疑いなくそのパイオニアの一人であると言ってよかろう。論者が得意とするのは、文献の博捜をもととした論証である。本論文はこの点で、世界の学界から見ても大きな意義を有するものとなっている。

本論文が持つ意義の第一としてあげるべきは、第一章「萬曆年間における普陀山の復興」で明らかにした諸点である。普陀山は中国浙江省寧波の沖合に浮かぶ小島であり、観音信仰の霊場としてつとに有名である。論者がここで問題にするのは、これまでの研究でほとんど取り上げられることのなかった、明代における普陀山の凋落と復興である。本章の論点としてまず特筆すべきは、巡礼などとは全く関係なさそうな『両浙海防類考』『両浙海防類考続編』という倭寇関連の文献の中に数多くの普陀山に関わる重要史料を見付け、倭寇が猖獗を極めた嘉靖年間から、豊臣秀吉による朝鮮出兵にともなって普陀山への渡航禁止がたびたび行われた萬曆二十年代までを見事にトレースしつつ、その凋落と復興及びそこへの巡礼の実態を明らかにしたことである。なかでも興味深いのは「倭夷はここ（普陀山）を経由し必ず登って焼香する」などの史料を示しつつ、普陀山は倭寇におびえる者のみならず、「倭夷」にとっても霊場であり、国際的な聖地であったと指摘する点である。当時、普陀山を含む舟山群島が「倭夷」や中国商人、ヨーロッパ商人からなる国際交易センターであったことは、これまででも知られていた。論者はさらに、普陀山で行商していた者の中に福建漳州の人、すなわち当時の中国で唯一東南アジア諸国との交易が公認されていた貿易港の人が多かったとの史料を示しつつ、普陀山参詣が盛んになった要因の一つとして、そこが海外交易の一大センターであったことを挙げている。興味深い指摘である。

普陀山が復興をとげるにあたって決定的に重要な役割をはたしたのは、萬曆皇帝の生母慈聖皇太后による寄進であったこと、民衆がそこへ巡礼するにあたっては、参詣のための代行業者がいたこと、彼らは今で言うパッケージツアーのような形で旅を提供していたとするのも、重要で興味深い指摘である。

本論文第二章「華北からの普陀山参詣」で指摘された諸点も、大きな意義を持つ。論者は2006年に普陀山へ赴き、現地の研究者の協力を得て碑刻の調査を行った。嘉靖二十五年（1546）と二十六年の碑刻には、それぞれ山東省と河南省から普陀

山に参詣した人々の名前が記されていることをもって、明末にはいくつかの省境を越え1千キロにも及ぼんとする巡礼が確かななされていたことを証明し、かつこれを『続金瓶梅』や『醒世姻縁伝』といった白話小説によって補強している。山東省や河南省では巡礼のために香会・香社と呼ばれる互助組織が作られ、これに香頭・会首と呼ばれるリーダーが置かれていた。遠距離の参詣には、しばしば僧侶や道士が大きな役割をはたしていた、との指摘も重要である。清代乾隆年間に河南省で巡礼禁止令が出されたことを検討しつつ、国家はそれを違法な行為であるとは通常見なさず、これを黙認していたとの指摘も、今回初めてなされた重要な指摘である。さらに第四章「泰山娘娘信仰の登場—明清における碧霞元君信仰の展開」で示されたいくつかの論点、すなわち山東省泰山の碧霞元君に対する信仰が、通説のように宋代に始まったものではなく、文献から見るかぎりやと明代中頃から始まったこと、これが盛んとなる契機はやはり皇后による寄進であったこと、碧霞元君という女神は民衆にとってかけ離れた存在ではなく、むしろ彼らはそれを「碧霞元君」と呼ばずに「娘娘」と親しみを込めて呼んでいた、との指摘も重要である。

このように本論文は近年の世界の学界の新しい潮流を受けつつ、これまでにない新鮮な事実を数多く提示している点で意義が大きい、もちろん問題もある。最も大きな問題は、全国規模でのいわゆる巡礼圏の問題に対して、明確な回答をいまだ出しえていないことである。また泰山娘娘信仰という重要なテーマに挑みながら、なぜ泰山で先行していた東嶽府君信仰から娘娘信仰へ民衆のエネルギーが変換するに至ったのか、説得的な解答をいまだ出しえていないのも惜まれる。しかしこれらの諸点についても、これまで論者が地道に収集してきた文献と、本論文で示されている高い研究能力からすれば、遠からず解答が与えられるであろうと期待できる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の論文として価値あるものと認められる。なお2010年2月19日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。